小学校における「安心できる（安定した）学級づくり」のための援助ニーズを考察

－　「チーム学級」のコーディネートを考える　－

学籍番号　199215
氏　　名　堤久美子
主指導教員　岡田和子

１．研究目的と課題

文部科学省（2018）は、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程の実現を目指す」と示している。そのため、地方自治体でも様々な取り組みがされており、国・自治体が理想とする学校の在り方として、子ども一人一人に対する多様な支援を担任と支援者（担任以外の児童に関わる者）に求められている。これらの取り組みを効果的に機能させるには、的確な支援の取り組みをマネジメントする人的・物的環境を整えることが必要である。

研究目的は、学級・学校課題の実態を把握し、個に応じた児童への支援に対応する支援方法を考察し、組織に必要な支援の要素を見つけ、学級を支援する「チーム学級」※のコーディネートを考え、「チーム学級」のメンバーをサポートするコーディネーターも必要と考え考察することで、「安心できる（安定した）学級づくり」のための支援ニーズを計画的に行うことができると考える。

※　実習者による「チーム学級」の定義は、担任だけで学級を作り上げるのではなく児童にとって身近な存在の指導者及び支援者が、児童観察や教室環境づくりなどの情報を共有して、更に意見を交換し、各学級の児童一人一人に細やかに支援する学級づくりをいう。

２．先行研究

深見（2019）は、「学級がうまく機能しない状況」について、学級担任の負担は大きく、学級担任の役割に対しての責任感から組織的で開かれた学級経営がされず、「学級がうまく機能しない状況」に陥るリスクが大きいと述べている。また、文部科学省（2012）は、「学習支援等が真に必要な児童生徒への手厚い支援」が必要であるとし、個に応じた支援の必要性を示し、林（2005）は、個に応じた指導を行うことが、学校における児童・生徒の確かな学力の向上や豊かな心の育成にも資するものとなると述べている。

また、家近（2017）は、学校心理学においての研究が「チーム学校」に貢献する可能性があるとし、石隈（1999、2016）「3 段階の心理教育的援助サービス」の考えが、実習者のいう「チーム学級」の取り組みに有効であり、「チーム学校」への重要な体制づくりの主な取り組みの

１つになると考えられる。

３．実習校の学校目標と研究成果と課題

実習校では、外国にルーツを持つ児童の増加により、多文化共生に関する実践を重点的に取り組み、子ども一人一人の状況に応じた学力向上への取り組みを掲げ、学校教育目標「考える子 心豊かな子 元気な子どもを育てる」を全職員で共通理解を図り、地域・家庭と連携のもと教育活動を行うとしている。

実習校の学校目標から、研究課題である「安心できる（安定した）学級づくり」に必要なプロセスとして、次に挙げた３つの支援の取り組みを実践し、まとめた。 ①学校全体の取り組み「全校あいさつ運動」では、登校時の様子を観察して学校生活に影響を及ぼす状態を探り、また、どのような支援が必要であるかも探った結果から、安心できる（安定した）学級環境となる取り組みとなった。②特別な支援を要する児童と不登校の児童に対する支援に違いがあることが明らかになったことから、支援員の役割を支援対象の児童に応じて変える必要があることがわかった。③ 学級に対する支援では、トラブル対応が多いと、担任は一人ひとりの児童との関わりをとる余裕がなくなることから担任の精神的負担も大きいと考えられ、支援員や専科教員による環境整備や児童への支援を通じて、担任の支援を行った。

実習学級に関わる教員へのアンケート調査より、実習学年の各担任及び特別支援教育コーディネーター担当者に対し、支援を要する児童について、支援者間でどのように連携しているのか、どのような支援を望んでいるのかを調査した結果、学級づくりにおいて、学校全体で学級を支援していける体制を計画的・組織的に整えることが必要であることがわかった。

４．まとめと考察

本研究では、小学校における「安心できる（安定した）学級づくり」のための援助ニーズを考察し、「児童理解、信頼関係、環境整備」の3つの観点を「チーム学級」構想に取り入れ、研究を進めた。「チーム学級」の組織は、担任、支援員、同僚教員、これらをコーディネートするチーム学級コーディネーターで構成され、各担当者がそれぞれの役割を効果的に果たすことで組織的かつ円滑に機能し、「安心できる（安定した）学級づくり」を支援することができると考える。「チーム学級」が全学級で機能すれば、学校経営の基盤が整えられ、「チーム学校」を構築することができると考えた。

本研究の成果として、「全校あいさつ運動」の取り組みは、朝の児童の様子が一日の学級に及ぼす行動と影響を予見する目安となり、個別の支援や学級を支援する際、児童の情報を共有することで、児童理解やトラブルの改善につながることが明らかになった。また、支援員が児童への個に応じた支援や学級内の環境整備をすることで、担任の支援に繋がり、負担軽減にもつながることがわかった。そして、支援員が他の教員等との連携及び情報共有のパイプ役としてのマネジメント力を備えれば、チーム学級コーディネーターとして、「チーム学級」に貢献し、更には「チーム学校」の一員として大きな力を発揮することが期待できると考えている。